

第54回神奈川建築コンクール 一般建築部門 最優秀作品選評 「七沢希望の丘初等学校」

審査委員 湯澤 正信

30年程の間ユニークな幼児教育を実践してきた経験から、その教育の理想を小学校へ展開すべく構想された全校児童120人の小さな学校である。設計者はこの理想を実現すべく敷地選びから参加している。いくつかの候補地が現れては消え、最終的にこの東丹沢の緑多い里山の敷地にめぐり合った。この敷地において、ゼロカーボン建築を目指す設計者と学校の教育思想が見事に共振し、特徴ある学校世界が出来上がった。

学校は生きる喜びを抱き、自ら学びを拓いていく子どもを育てることを目標とし、学年の枠を超えた縦割りのグループ活動によるノングレードの生活・学習等、意欲的な教育方法を実践している。建築のコンセプトはその教育方針2つから導き出された。

一つは共同性・連帯性を育む環境づくりで、県産材を用いた山型の力強い木架構がジグザグと一列に続き大屋根を構成し、その下に「みんなの大きな一つの家」が実現されている。教育の集団や活動の多様さに対応し、3, 2, 1学年分と大きさの異なる3つの普通教室がつくられ、中央部分の管理部門、図書コーナー、特別教室により結ばれる。全てはワンルーム状につながり、非常にコンパクトな平面が出来上がっている。教室の両側面には柱により緩く区画されたアルコーブが並び、子どもたちの様々な活動を可能としている。空間は不定形に見える形状や木質であることから人間的で温かい。それは通常の一般的な学校によくある同じような教室が並ぶシステムティックなものから完全に自由な形式を示しており、教育と一体化した新しい学校空間のあり方を示唆していると高く評価できる。

もう一つは七沢の里山の自然と共生し、本物に触れるという教育方針で、設計者はこの小さな里山の敷地をエネルギー的に完結した一つの環境世界としてとらえ、そこに、雨水・汚水の敷地内浸透、地中熱により暖められた森からの新鮮空気の給気、チップ材の熱源等、自然力を活用した自立型の環境建築を実現した。

遠景から見ると、こんもりとした樹木に囲われ、林間学校のような非日常的な不思議さを漂わせている。小さな里山と一体化したこの希望の学校はまだ第1学年の児童しかいないヨチヨチ歩きの状態である。ここに完成形の120名の子どもが揃った時の楽しさ、賑やかさを想像し、建物に込められた関係者の思いが大地にしっかりと根付くことを期待する。